

Weekly コラム

平成 28 年 1 月 24 日

〒541-0055 大阪府中央区船場中央 2-1

船場センタービル 4 号館 4 階

船場経済倶楽部

Tel 06-6261-8000

(NPO 法人 SKC 企業振興連盟協議会)

Fax 06-6261-6539

人の輪・衆智・繁栄

活動方針



当団体は、異なる業種の経営者が相集い、力を合わせ、自らの研鑽と親睦を通じて、斬新な経営感覚と新たな販売促進を創造して、メンバー同士でより健全な事業所とその事業所のイメージアップを図り、地域社会に貢献できる事業所となることを目的とする。

そんなバナナ

日本は世界有数のバナナ消費国ですが、フィリピンなどから年間96万トン輸入されており、99%以上を輸入に頼っています。そんなバナナが、新パナマ病という新しい伝染病により、将来、生産量が大きく落ち込む懸念が出ています。ところがそんな中、新たな光が見え始めているのです。

まず、バナナは1950年代から輸入が拡大していきましたが、60年代、当時のバナナの品種であるグロミシェルというものは、パナマ病という伝染病によって絶滅しました。パナマ病はバナナ特有の病気で、土壌が菌で汚染され、木は枯れてしまい、その圃場では2~30年の間バナナが作れなくなる恐ろしい伝染病です。そして、現在普及しているのはキャベンディッシュという品種で、最近ニュースでもよく取り上げられていますように、新パナマ病の発生によって、生産量が大きく落ち込む可能性があると考えられています。実際、フィリピン最大の産地、南部ミンダナオ島では、ここ数年で被害が急速に拡大しており、島にあるバナナの木の5分の1はすでに感染し、生産量もこの5年で20%以上も減少しているのです。また、フィリピン政府は新パナマ病に強い品種の開発を進めていますが、実用化のメドはまだ立っていません。

そこで、日本でバナナを生産できないか、40年間研究を続けていた岡山の農業法人が、凍結解凍覚醒法という独自の手法で、国産バナ

ナの栽培に成功しました。具体的には、バナナの苗を一旦マイナス60度に凍結し、解凍したものを植えるというものです。今から2万年前、氷河期が終わり徐々に気温が上昇していく過程で、植物は長い冬眠から目覚め、繁殖してきました。凍結・解凍によって人工的に2万年前の状態を作り出し、バナナという植物の本来の力を引き出そうと実験を繰り返した結果、栽培に成功したのです。通常バナナは収穫するまでに10~14ヶ月かかりますが、この方法だと約4ヶ月で収穫ができ、さらに農薬も遺伝子組み換えも使用しないため、安全面からも注目されています。

2017年から大阪の大手化学会社が、この方法を使ったバナナ栽培を開始する見通しもあり、鹿児島県南九州市も地域の農業法人を通じて、国産バナナの栽培を始めます。世界中でも注目されており、バナナ大手のドール社からも、共同事業展開を前提にした提携の打診が来ています。さらに、全国の休耕田の3割でバナナ栽培ができれば市場規模は6000億円になり、20万人の雇用が発生するとの試算もあるぐらいです。日本がバナナ輸出国になる日もそう遠くはないかもしれませんね。



記事の内容に関するお問い合わせは事務局までご連絡ください。